

善を矯正しようとしてゐる所から起るのだ。何人も他人を罰することは出来ぬ故に、人は常に誰をでも許し、幾度でも限りなく許さねばならぬのである。この社會が今日ともかく或る程度の秩序を保たれてゐるのは、彼等獄吏や裁判官のお蔭ではなく、彼等の悪感化があるにも拘らず、人々に尙互ひに相憐み、相愛する心があるからだど、ネフリユードは断定した。

彼はそれから福音書を始めから読み返した。何時でも感動させられる山上の垂訓の所も、今始めて眞に理解出来たやうな気がした。それは決して誇張した不可能の要求を述べた單なる美しい抽象的な訓へではなくして、最も簡單明白な實際上の法則である。

ネフリユードはランプを見詰めながらちつと坐つてゐたが、心は靜かに落着いてゐた。人々が皆之等の規則に従ふやうになつたら、この世の生活が如何に變つて行くかといふことが、あり／＼と眼に見えるやうな気がした。

彼はこの夜到頭終夜眠らずに、福音書を讀む人によく有り勝ちな、今迄不注意で過ぎてゐた言葉の全意義が、始めて理解されたやうな喜びに全心を浸らせることが出来た。殊に馬太傳の中の葡萄園の比喩は彼をいたく感動させた。葡萄造りの農夫等は、その主人を忘れ、主人のあることを思ひ出させる者は皆殺して了ひ主人から預つてゐる葡萄園は自分自身のもの、その内にあるものは皆自分達の爲めに造られたもの、自分等の仕事はこの葡萄園の中で楽しく暮すことだと思つてゐる。

「我々もそれと同じことをしてゐるのではないか」と彼は考へた。「我々が自分の生活を支配するものは自分だと思ひ、また人間の生活は享樂する爲めに與へられたものだと思へたならば、それこそ大なる誤りである。我々は或るものゝ意志によつて、或る目的の爲めにこの世へ送られたものである」

(天國と神の正義を求めよ。すべてのものは従つて得らるべし)

「然るに我々はそれによらずして、すべてのものを求めたので、當然失敗したのだ。さうだ、此處にこそ——我々の生涯の務めがあるんだ」

この夜はネフリユードにとつては全く新しい生活の曙であつた。けれどもそれは勿論新しい生活へ入つたからではなくて、この夜以後、事々物々が、前とは全然變つた新しい意味を持つて來たからである。

ネフリユードのこの新生活の紀元が如何にして終るかは、たゞ歲月によつてのみ證明せらるゝであらう (完)

復 活

定價 一圓五十錢

昭和四十五年五月廿五日印刷
昭和四十五年五月三十日發行

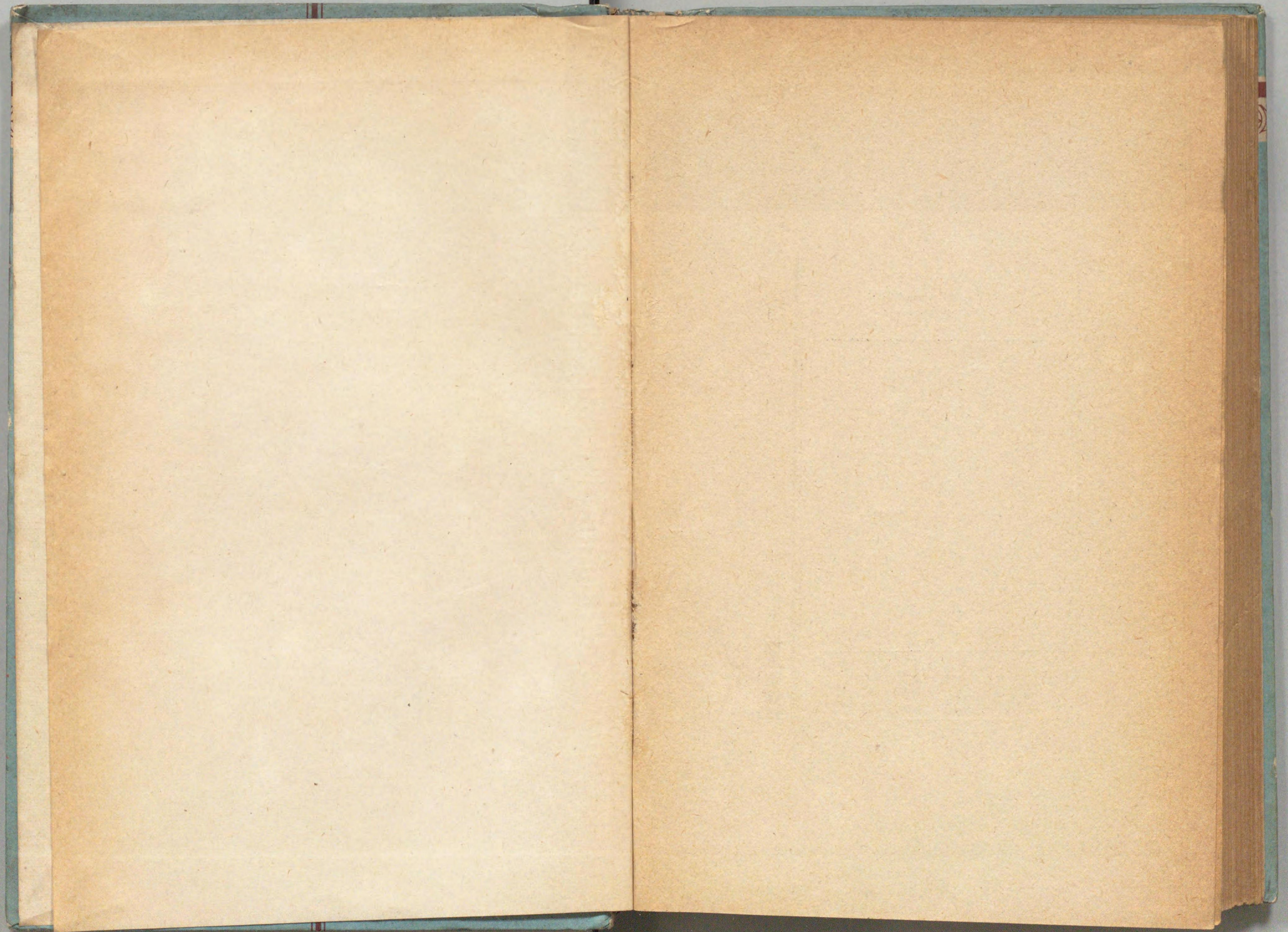


野村賢三	東 京 市 草 草 區 香 町 一 丁 一 番	譯 者
大山輝彦	東 京 市 草 草 區 石 川 四 丁 六 番	印 刷 者
渡邊勝衛	東 京 市 草 草 區 香 町 一 丁 一 番	發 行 者

發行所

東京市淺草區香町一ノ一
電話淺草一三三八番
振替東京四六三三三番

東 江 堂



389
494

